こどもが まんなか

いわてのWAっこ

いわて幼児教育センター通信
No.6　令和7年11月19日発行
発行・編集
岩手県教育委員会事務局学校教育室
（いわて幼児教育センター）
本通信は岩手県HPからダウンロードできます
https://www.pref.iwate.jp/kyouikubunka/kyouiku/gakkou/1006358/1058868.html

きらきら☆いわてっこ

いわて幼児教育センターの専門員が先月に訪問支援した園で見つけた、ワクワクドキドキな姿をご紹介します。今月は、様々な園・年齢の事例から見取った、子供の姿と保育者の関わりです。

「遊びは学び　学びは遊び　やってみたいが学びの芽」

～保育者の見取りと、望ましい環境構成と援助を考える～

＜**2歳児**＞「ここにね、ダンゴムシいたの」「もういないね」「どこいった」「おねえちゃんもいたのに」「おとうさんも」「寒くなったからおうちに帰ったかなぁ」「またくる？」「そうだね」

保育者は、子どもたちがダンゴムシをまるで人間の家族のようにとらえて会話する姿に共感しています。この共感が次にダンゴムシに出会った時の学びにつながると考えているからです。

＜**4歳児**＞ハロウィンごっこの準備中。「先生、あのね、みつあみの髪を付けたいの」「エクステ？」「そうそう」「どうする？」「テープでやってみたいから、押さえていて」「いいよ」

安心して自分の『やってみたい』に挑戦できるのは、思いを受け止めてくれ、時には力を貸してくれる保育者がいるからです。

保育者がプリントアウトした写真

＜**4歳児**＞園庭に準備されたテーブルに集まって、秋の草花の図鑑を作っていました。「面白い虫も見つけたから載せようよ」と虫を描くことになりました。B児がバケツの中の虫をのぞき込んでいます。「逃がさないでよ」「大丈夫」「うまく描ける？」「うん！」

保育者は、『やってみたい』が実現できるように、子どもだけではできないことの手助けや、必要な物の準備等の援助をします。

＜**5歳児**＞サッカーの作戦会議で、ポジションを確認しています。キーパーでもめましたが、サッカーに詳しい子の「途中交代だな」の一言で一件落着。専門的な一言が子どもたちのワクワクにつながったようです。保育者は思いを伝えあう様子を見守ったり、十分に遊びこむ時間を保障したりしています。また、『好きなこと』や『もっとこんなふうにやってみたい』から生まれる工夫や試行錯誤をさり気なく支え、学びが生まれる環境を大切にしていきます。

時間と点数の見える化

(4)保育の環境

ア　遊びが展開する中で、子ども自らが環境をつくり替えていくことや、環境の変化を保育士等も子どもたちと共に楽しみ、思いを共有することが大切である。

エ　保育の環境の構成に当たっては、複数の友達と遊べる遊具やコーナーなどを設定するとともに、物の配置や子どもの動線などに配慮することが重要である。

（保育所保育指針解説 P25　P26）

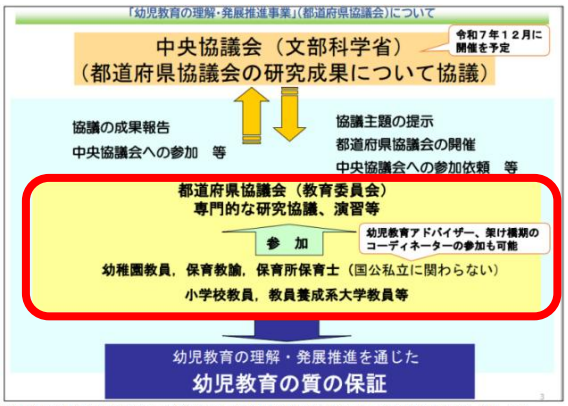
（観察者の目）

保育者が日々の保育で子どもの様子を観察したり記録したりすることは、子どもの内面を深く理解するために大切なことです。**「子どもの視点」**（遊びや生活の様子）と、**「保育者の視点」**（ねらいや関わりが適切だったか）の双方から考え、子どもの表情や言動の背後にある思いや体験の意味を、多面的に深く読み取っていきましょう。

保育者の『個々の子どもへの深い理解に基づいた援助を振り返り、改善点を次の計画に反映させる』という積み重ねが保育の質の向上につながっていきます。

研修の報告 ～R7.9.18 岩手県幼児教育研究協議会～

この研究協議会は、12月に文部科学省の主催で行われる中央協議会につながる協議会であり、各都道府県で共通の協議主題に沿って行われているものです。今年度は、文部科学省の平手咲子調査官に来県していただき、「資質・能力をつなぐ架け橋期のカリキュラムの実施」と題して、幼児教育と小学校教育のつながりについて、全国の様々な事例も含めて詳しく教えていただきました。その後、3つの園等による実践発表について協議し、参加者それぞれに学びを深める場となりました。



令和７年度幼児教育担当指導主事・担当者及び幼児教育と小学校教育の接続に関する担当指導主事会議　資料　より

＜協議主題＞
幼児教育と小学校教育の円滑な接続の推進について
＜協議の視点＞
① 幼児教育施設間、幼児教育施設と小学校間における相互理解の促進
② 架け橋期のカリキュラムの開発・実施

平手咲子調査官

自分の実践と重ねながら活発な協議

北上市立藤根幼稚園（北上市）

～幼児の姿から「交流」「連携」の在り方を探る～

・既存の交流会のみでなく、子供の姿から職員が学び合う交流の仕方にしたことで、小学校との連携の相互理解が進み、ねらいや願い、思いを共有できた。
・その年の子供達によって、同じ活動をしていても興味をもつ場面が変わってくる。その姿を捉えた交流をすることで、不安から期待へと導いたり、円滑な接続につながったりすることが分かった。

正福寺幼稚園（釜石市）

～「やってみたい」から遊び込む子どもの姿を目指して～

・異年齢交流の中で見られた3歳児の姿や、その後のクラスでの遊びの変化を事例として整理した。それらをもとに「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに子供の姿を共有しながら環境構成や援助の在り方について園内で共有することができた。

緑が丘ひまわりこども園（盛岡市）

～幼児教育と小学校教育の円滑な接続の推進について～

・幼小双方が互いの状況や時期を尊重しながら関わり続け、少しずつつながりができてきた。
・年長組保護者向けのリーフレットを作成し、子どもも保護者も安心して入学を迎えられる手立てとした。
・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに園内研修を重ねた。

【こんなことが大事だと共通理解しました】
・子どもを主語にして考えること
・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の活用において、子供の姿を10の姿にあてはめるだけでなく、そう考えた理由やその先の環境や援助を考える研修の積み重ね
・組織的な推進を進めるための相手意識、取組の過程の継承

市町村の取組の紹介～岩手町架け橋期のカリキュラム開発会議～

町内の各小学校と園等、行政担当者合わせて 22 名が参加して会議を行いました。先生方の学ぼうとする意欲がとても伝わってくる会議でした。始めに行った保育参観では、「保育者が子供達の思いや意欲を引き出すような言葉かけを常に意識していた」「グループ分けも子供達に委ねていて、自己決定を大事にしていることが伺えた」等、子供達の育ちを見取る中から、教師の関わりや環境についての学びを皆で共有しました。

その後、写真のように、岩手町「架け橋期のカリキュラム」をもとに協議を行いました。「互いを知る機会があったからこそ、幼小の活動の重なりがある（経験をつなぐことができる）ことに気付いた」「教師の意識で子供たちに育つ力が変わってくる」「導入を工夫したり、子供を信じて任せたりなど、できることをどんどん取り入れていきたい」・・・。架け橋プログラムが目指すのは「保育・教育がどちらも充実したものになっていくこと」です。岩手町の開発会議のように、お互いを知り、先生達の学びを共有し実践に生かそうとすることは、架け橋の始まりそのものです。

よろしければ、各市町村・園の取組の様子をお寄せください。「いわてのWA っこ」等を通して、すべての子どもたちと学校のウェルビーイングの実現のために、県内の皆さんの共有財産にしていきましょう。

【担当】
いわて幼児教育センター
Tel:019-629-6149
EmailDB0003@pref.iwate.jp